AACK 京都大学学士山岳会 No.57

Newsletter

June 2011

http://www.aack.or.jp

目次

遭難から二〇年、初めて訪ねた梅里雪山の大雪崩　北上田　毅……1
コメント　岩坪五郎・小林尚礼……4
地震、津波そして原発事故　荻野和彦……5
梅棹さんの作文指南　～『ガネッシュの蒼い氷』誕生まで　上田　豊……8
西堀榮三郎邸の公開と南極探検特別企画展の開催　栗本俊和……10
会員動向　訃報　近藤良夫名誉会員、松本徑夫会員、菊池卓郎会員　前田　司……12
山口・廣瀬追悼歌集ＤＶＤ　前田　司……12
事務局報告……14

遭難から二〇年、初めて訪ねた梅里雪山の大雪崩

北上田　毅

本年三月一一日から三一日まで、梅里雪山の麓の村を訪ねた。

私は、遭難した遠征隊の隊長だった井上治郎と山岳部で同期だった。あれから二〇年、いつも彼が遭難した梅里雪山のことが気になっていたが、今回、初めて現地を訪問することができ、やはり、ほっとしている。

今回の梅里雪山行は、遺体捜索、搬出等でお世話になった明永村のチャシ村長（当時）の娘・ペマツォモさんと知り合ったことをきっかけとして実現した。彼女は、ＡＡＣＫ有志の援助で来日し、二年間、東京で日本語を学んだ後、昨春、同志社大学に合格した。そして全くの偶然だが、私の古くからの友人・Ｍさんが寮母をしている大学の女子寮に入ったのだ。Ｍさんから「こんど寮にチベットの娘が来たよ。」と言われ、あるいは、と思ったら、やはりペマツォモさんだった。すぐに紹介してもらい、一緒に花見をしたり、食事をするなど、親しくなった。

そして、彼女に誘われ、この春休みに、一時帰郷した彼女を訪ねることになったのだ。京都新聞のＦ記者が同行、昆明の大学で調査をしていた山岳部のＴ君もシャングリラで合流した。

ベースキャンプを襲った大雪崩を目撃
―雪煙は雨崩の村まで届いた！

三月一二日は、白馬雪山の四二九〇ｍの峠が大雪のため通行禁止になってしまったので、シャングリラに一泊。一三日、雪の峠道を、チェーンをつけた四輪駆動車で超える。そして、一四日に、桃の花が満開の明永（ミンヨン）村に着き、翌日、雪のナゾヤ峠（三七五〇ｍ）を超えて、雨崩（ユイポン）の村に入った。この日まで天候が悪く、梅里雪山は、まだ、その姿を見せてくれない。

一六日になってやっと天候は回復した。早朝、Ｆ記者と二人で、峠まで戻り、さらに少し上の台地に登った。この日は、雲一つない快晴。メツモ（六〇五四ｍ）の鋭鋒から、主峰カワクボ（六七四〇ｍ）までの山並みが朝の光を受けて輝いている。あまりの神々しさに、もう言葉もない。

日本を発つ前、井上悦子さんに、梅里雪山に行くと電話した。彼女は、「ありがとうございます。どうか井

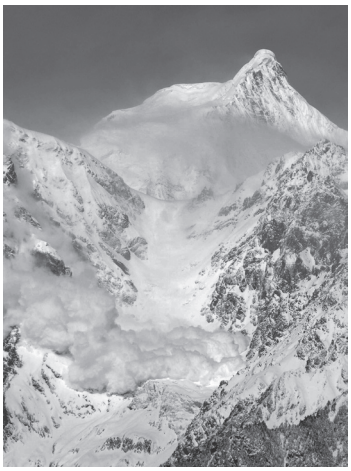
梅里雪山で発生した大雪崩（数字は撮影順）

三月一六日、かっての登山隊がベースキャンプとした放牧地を襲う大雪崩が発生した。（京都新聞二〇一一年四月二三日夕刊掲載。京都新聞社提供）

②

③

ベースキャンプの放牧地を襲う雪崩

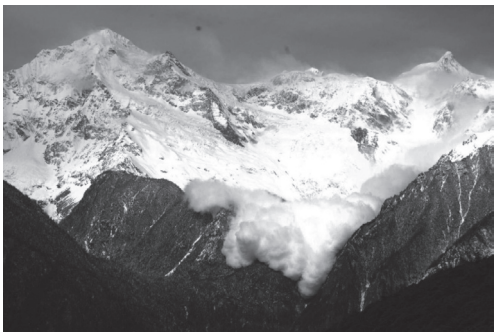


①

発生直後、雪崩の一部は、中央の岩稜を乗り越え、第一キャンプも襲っている。（京都新聞藤松記者撮影）

⑤

雪煙は、雨崩・上村の奥の谷まで達した。



④

雪崩は、ベースキャンプの谷からあふれ、樹林帯を下った。

上に会ってやってきてください。」と言ってくれた。遭難後、彼女が他の遺族の方とともに梅里雪山を訪れたとき、慰霊碑の前で読経が始まった途端、それまで雲に覆われていた山頂が、突然姿を現した。彼女は、その時、やはり井上治郎が会いに来てくれたと思ったという。私も、この日、初めて現れたカワクボの輝く山頂を見た時、遭難から二〇年経って、やっと彼に会えたような気がして、思わず胸がいっぱいになった。

その瞬間だった。ハッと気がつくと、第二次、第三次登山隊がベースキャンプとした放牧地のカールの上部が真っ白に沸き上がっている。大雪崩が発生したのだ。あまりの光景に、さすがに足がすくむ。すぐに放牧地の広いカールはムクムクと舞い上がる雪煙でいっぱいになり、そのまま手前の尾根からあふれて樹林帯をうねりながら降り始めた。まるで、白い大津波が山を飲み込みながら駆け下りているような光景だった。そして、雪煙は雨崩の上村の奥の谷まで下り、下村との間の尾根を少し超えたところでやっと消えていった。(後に写真データを見ると、雪崩発生は、午前一一時二〇分。雪煙が消えたのは、その約一二分後だった。)

午後、雨崩村に被害はなかったかと気になり、あわてて下山した。村に残っていたペマツォモさんたちに聞くと、晴れていたのに、一瞬、雪が舞い、一体、何事かと驚いたという。村の人たちも、村にまで雪煙が届いた雪崩は初めてだと大騒ぎしている。我々が雪崩の一部始終の写真を撮ったというと、多くの村人たちが、ぜひ、見せてくれと集まってきた。宿の主人にも、ぜひ、雪崩の写真をプリントして送ってくれと頼まれた。

小林尚礼さんによると、一九九六年の冬、第三次登山隊が帰った直後に、やはりベースキャンプ周辺が大雪崩に襲われ、放牧小屋が吹き飛び、樹齢一〇〇年近い大木が大量になぎ倒されたという。今回は、まだ、放牧小屋周辺の状況は分からず、雪崩の詳細や大きさは比較できないが、写真を見た小林さんからは、その時の雪崩よりも大きいのではないかというコメントが寄せられた。

それにしても、一九九一年に井上らを襲った雪崩から二〇年、ちょうど私が来た時に、こんな大雪崩が発生するなんて、なんという偶然だろう。京都新聞のF記者は、四月二三日の特集記事に、「二〇年前の再現を見ている気がした。」と書いたが、あの時も、こんな様子だったのだろうか？　また、帰国後、AACKのある方から、「旧友が来たので、井上たちが、思わず、歓迎の身震いをしたのでしょう。」と言われたが、確かに、そんな気がする。それにしても、梅里雪山の自然の驚異には、驚くほかない。

季節外れの大雪で峠が越せない！

一週間、明永の村に足止め

今回の梅里雪山行は、当初は、三月二六日に帰国予定だった。しかし、帰途、季節外れの大雪のため、白馬雪山の四二九〇ｍの峠が通行不能となり、明永の村に閉じ込められたまま、何日も待機を強いられた。

帰りの航空券がダメになってしまうので、三月二三日、二四日と、四輪駆動の車をチャーターし、雪の峠道の突破を図った。徳欽(デーチン)では、警察が、通行禁止措置にしていたが、「自己責任で行きます。」と一筆書いて、なんとか峠に向かった。しかし、峠の先で、やはり深雪で動けなくなり、引き返さざるを得なかった。峠付近では、数台の車が動けなくなって夜を過ごし、警察が出動するなどの騒ぎになっていた。我々も、一歩間違うと、車に閉じ込められたまま、食糧も水もなく、夜を過ごさなければならなくなるところだった。帰りの航空券も、とうとう、この時点でダメになってしまった。

こうして、雨の降り続く明永の村で、チャシさんの家にお世話になって、ただ、ひたすら天候の回復を待った。ペマツォモさんの家族や親戚の人たちともゆっくりできたし、瀾滄江の河原にある温泉を訪ねたり、氷河の近くまで木耳を取りに行ったりと、それはそれで楽しかったが、やはり、テレビに流れる福島原発の報道にハラハラし、早く帰国したかった。ペマツォモさんも、大学の新年度の手続があるので焦っていた。チャシさんは、峠道をあきらめ、古馬茶道を北に辿り、二日かけて四川省に抜けるルートはどうかと言ってくれた。面白そうなルートで行きたかったが、一部、チベット自治区を通過するので、許可証を取得していない我々には無理だった。

三月二七日になって、やっと晴れ間が出たので、二八日に再度、峠越えに挑戦した。しかし、今度は、下る車、上がって来る車が、

除雪が不十分な細い道で離合が出来ず、結局、警察がまた、下りの車を通行止にしてしまった。やむなく、麓の徳欽に引き返し、翌朝の午前七時、まだ暗いうちに出発した。そして、深夜、日付の変わる頃に、なんとかシャングリラの街に着くことができた。

この時の運転手は、アニー・ラマというラマ教のお坊さん。チャシさんの義理の弟にあたる。彼は、お経のCDを流し、自らもお経を唱えながら、深い雪の道を見事に走りぬいてくれた。ヒヤヒヤするような雪の崖道だったが、お坊さんが、お経を唱えてくれているのだから、もう、何時、死んでもよいと開き直るほかなかった。

それにしても、遭難から二〇年、初めての梅里雪山は、やはり、凄かった。井上たちは、「おお、来てくれたか！」と興奮して大雪崩を起し、そして、帰途は、「ええやないか、まだ帰るなよ。」と言って、私を、長く、明永の村に引き留めてくれたのにちがいない。

予定以上の長い滞在になり、チャシさんやペマツォモさんたちには、本当にお世話になった。心からのお礼を申し上げたい。

（その後、京都新聞のF記者は、四月二三日（夕刊）の「カメラは見た」という一面全部を使った特集記事にこの雪崩の大きな写真を掲載し、さらに四月二七日から五日間にわたって、「友の眠る山　中国・雲南　京大登山隊遭難二〇年」という連載を執筆された。）

〈追記〉大雪崩は、ベースキャンプと第一キャンプを同時に襲った

現地では分からなかったが、四月二三日、京都新聞に掲載された大雪崩の写真を見て、新しい事実に気がついた。

ちょうど雪崩が発生する直前、私は、望遠レンズをFさんに貸したばかりだった。従って、発生からしばらくの間は、Fさんしか写真を撮れていない。私が望遠レンズを返してもらって最初に撮った写真では、もうベースキャンプの谷いっぱいに雪煙が舞い上がっていたので気がつかなかったが、その直前にFさんが撮った京都新聞掲載の写真（添付写真参照）では、第一キャンプがあった雪原一帯にも、大きな雪煙があがり、その先端は、右手の尾根のかなり上まで達している。

念のため、Fさんに、その前の写真を送ってもらった。全景の写真はなかったが、第一キャンプ周辺の写真を見ると、第一キャンプ左手の岩稜から第一キャンプの雪原にかけて、雪煙が舞い上がっていた。（第一キャンプからベースキャンプへの谷への雪崩の流れはない。）

すなわち、この雪崩は、プジョン・ソンジェワンショ峰（六〇〇〇m）の東面の氷河上部で発生し、ベースキャンプを襲ったのだが、その一部は、中央の岩稜を乗り超えて、登山隊が登路とした氷河に入り、第一キャンプの雪原を襲ったものと推測できる。二つの氷河にまたがり、ベースキャンプと第一キャンプをほぼ同時に襲ったのだ。

第一キャンプは標高四五〇〇mだから、雪崩は、少なくとも、標高五〇〇〇m付近で発生したことになる。そして、ベースキャンプ（三五五〇m）の谷からあふれ、さらに樹林帯を下った。雪崩本体が何処まで達したのかは分からないが、雪煙は、雨崩の上村（三二二〇m）の奥の谷まで届いている。標高差にして一五〇〇m以上も落下したと思われる。

コメント　雨崩BCの樹木の年輪

岩坪五郎

北上田さんお帰りなさい。

雨崩村の奥、二次隊、三次隊がBCにしていた夏小屋周辺林の雪崩について、私の経験を報告しておきます。

一九九一年五月、私は夏小屋周辺のトウヒ類の切り株の年輪を数えましたところ、皆、八〇年前後でした。その中に二本でしたか、朽ちかけたカラマツ類の巨木がありました。

夏小屋から一キロほど奥に、左から右へデブリが駆け抜けたようにトウヒ類がなく、カラマツ類の樹高一メートルほどのが群生している幅一〇メートルほどの部分があり、年輪は皆、七・八年でした。中島暢太郎さんから、安成さんの調査によると、八年前かに大雪があったはずだとのことでしたので、この部分が雪崩にやられ、いま、カラマツ類が更新している。その後、トウヒ類が更新するのだな、と思いました。そして、一〇〇年に一度くらい、BC部分も大雪崩にやられるのかと思っておりました。

その後、三次隊の後、一九九六年に大雪崩

があり、夏小屋周辺がやられたと小林尚礼さんから聞き、一〇〇年目の大雪崩が来たかと思いましたが、今回もやられたとすると、今回は一五年目です。

一九九一年、中国側の代表、曽曙生さんは、次回はBCをもっと下方に置くべきだといい、私は、ここ約一〇〇年この場所はやられていないよ、といいましたが、今回はわずか一五年でまたやられたということになります。

コメント　北上田さま

小林尚礼

雪の白馬雪山越え、お疲れさまでした。大雪崩の写真を拝見して、驚愕しました。二次隊・三次隊ベースキャンプのカールには、これほど大規模な雪崩が起きるのですね。

写真の雪煙の先端あたりには高度差一〇〇m以上の小尾根がある筈ですが、ベースキャンプの夏小屋とその先の樹林帯を飲みこんだ雪崩は、さらにその先の小尾根を軽々と乗り越えて村の近くまで達したということですね。

一九九六年の三次隊撤収のあとに、ベースキャンプの夏小屋を吹き飛ばした雪崩が発生したと聞きましたが、あのときは村まで雪崩の音が聞こえたとしか、聞いていません。

村近くまで雪煙が届いた今回の雪崩は、一九九六年のものよりも大きいと思います。

北上田さんたちは大雪崩の日にベースキャンプ方面へ散策に出かける可能性もあったとのこと、ご無事で何よりでした。

改めて、カワカブ（梅里雪山）の自然の巨大さを思い知らされました。

地震、津波そして原発事故

荻野和彦

三月一一日、京都市内のある会合で発言しているとき、天井から吊り下げられたランプがはげしく揺れた。大きな地震だと思った。宮城県沖にマグニチュード八・四（後日、マグニチュードは九・〇に変更された）の巨大地震が発生したと伝えられた。会議を終えて京都駅にいったのが一七時過ぎ、一五時二六分発のひかりがホームに停まったままになっていた。二〇時三〇分を過ぎてようやく動き出すまでに、長いことまたされたがなんとか夜半には自宅に帰り着いた。首都圏では多くの帰宅難民がでたということだった。我が家での揺れは東西方向だったらしく、東または西の壁面に立てていた本箱が倒れ、本や資料が散乱し、パソコンがすっ飛んでいた。

日本山岳会アルパインスキークラブは東北地方に多くの会員がいる。その安否が気遣われた。ほどなく八戸、仙台在住の会員から巨大地震、津波の第一報が入った。地震もさることながら大津波の猛威、そして原発事故の脅威が伝えられていた。

「宮城のSです。私の実家と職場がある宮城県亘理郡山元町も津波の災害が表現できないほどの状況です。津波は一二m以上ぐらいの高さがあったようです。海岸線の住宅などは、根こそぎ流されています。（中略）一瞬にして家を流された人たちは、着のみ着のままですから、本当に苦労しておられます。地震、津波、その上に、原発事故の影響ものしかかって大変憂慮しています。私の居るところは原発から五五㎞ぐらいです。昨日、私が勤務している事務所に、共同通信の記者が来て取材していきました。その記者の首には、放射能の検知機が下がっておりました。取材者に持たされているとのことでした。」

これはたいへんなことなのだ。ほうってはおけない、と思った。

三月二五日、まず八戸の三人の友人を訪ねた。三人が無事であることは知っていたが、津波の現状を知りたくて、高速バスが使えるようになったのでとりあえず行って見てきたのである。

東北道は大型トラックでいっぱいだった。夜行バスは途中、トイレ休憩をするはずだが、何箇所ものSA、PAに入っては出ることを繰り返した。バスを停めるスペースがないのだ。一般車の通行規制がようやく解除されたために、いっせいに車が動き出したらしい。訪ねたNさんが二四日朝、通勤途次交通事故に会い右側頭部に裂傷を受けて救急車で病院に搬送されていた。海岸にあった会社が津波に襲われて壊滅したため、電気関係の技術者

として復旧に取り組んでいたさなか、七キロあまりの自転車通勤はたいへんだけれど、これからも山に行くためのトレーニングと考えるといっていた矢先のことだった。

Oさんは八戸市の水道局を定年で退職して、悠々自適の生活を送っている。退職したとはいえ、水道のことが気になるといっていた。八戸広域水道施設で、地震で水道管のパイプが外れたところが四箇所あった。が、即日、市の職員が出動して修復することができた。広域水道事業の責任者として気にしていたところが大丈夫だったことを、誇らしく思っているとのことだった。激震地帯では水道に被害があったところが多い。例えば福島県の郡山市は五五〇箇所に破断が生じて、数十人からなる応援チームを依頼してきた。八戸の水道設備技術はきわめて高い評価を受けている。阪神大震災のとき、八戸方式による水道管は壊れなかった。あの震災をみごとに生き残ったことで、八戸技術は証明されている。インフラ整備は一日ではできない。何年もかけてようやく整備することができる。日常的な整備を怠ったつけと戒める必要がある。天災の蔭に隠れた人災を見逃してはならないと結んだ。

海自のSさんは被災地への物資輸送に献身的に取り組んでいた。「福島第一」の放水は陸自が行ったが、各地の飛行場の放水車が応援に出かけており、海自も深く関係しているという。海陸を問わず、自衛隊は一〇万人体制で復興支援にあたっている。津波被災の救援は瓦礫の取り片付けと遺体収容がおこなわれ、すさまじい光景に直面するという。しかし、たいへん印象的だったのは、自衛隊は一義的には国防についていることを忘れてはいない。災害のときこそ、海自の活動域が空中、海上、海中に増えていると言ったことである。

八戸を貫いて馬渕川、新井田川というふたつの川が流れている。N、Sさんの自宅は海抜六～八メートルというので、津波が襲ったのではないかとたいへん心配していた。事実、Sさん宅は末の娘さんがひとりでいるときに地震に襲われ、お母さん（S夫人）が急いで帰って、高台に避難させたという。津波は新井田川を遡上したが、堤防を越えることなくN、Sさんの自宅は被災を免れたという。Oさんは地震のとき馬渕川の対岸で車を走らせていたが、ひどい揺れかただった。ようやく建物の切れ目に車を止めて、揺れが収まるのを待った。揺れが収まったとき、馬渕川にかかる橋が落ちていないことを確かめて、いそいで自宅に帰った。そこは高台にあるので、津波に対しては平気だった。

旧い八戸の住宅は高みにある。地震はひどかったが、ほとんどの家屋は倒壊をまぬかれていた。なんどもの震災の教訓を生かしたものが生き残るとOさん。海岸沿いには新しく開発された工場群が建ち並んでいて、ここが壊滅的な打撃を受けた。漁港もひどいことになっていた。海抜五メートル位までに建つ木造の建物はすべてなぎ倒すように壊れてしまっていた。海底を浚うように真っ黒な砂が岸壁を覆っていた。取り片付けようと積み上げたところからヘドロの臭いが立ち込めていた。八戸の人々は賢明で津波に対処することを知っていた。ひどい津波に襲われたにもかかわらず、亡くなった人はひとりだったという。漁師の奥さんだった。ご主人が船を沖に出したのを見送って避難するはずだったのに、ご主人のことを慮ってか、海岸に戻ったところを津波に襲われたのだといわれている。

八戸の津波の印象は木登りしている車とか、陸に上ってごろりと寝転がってるイカ釣り船とか、不謹慎な言いかたになるがコミカルな情景を見せられているというところがあった。

四月五日に宮城県の山元町を訪ねた。仙台まで高速バスで、ようやく通じた東北線の電車で岩沼まで行き、あとは復旧の見込みなしの常磐線の部分は、二〇キロほど歩くつもりだった。つらい一日になるはずだったが、坂元支所まで運行しているバス便がちょうどでるところだった。おかげで歩くことなく、午前中の早い時間帯に山元町に入ることができた。仕事場のSさんがピックアップしてくれた。高台にあるSさんの自宅は無傷だったという。が、低地のありさまはすさまじかった。海岸を覆っていた防潮、防風林は跡形もなくなっていた。家が建っていたと思しきところに残っている基礎、土台。掘りごたつのあとが侘しく、悲しい。常磐線は線路敷から線路、枕木が数百、数十メートルも吹き飛ばされてしまっている。架線を支えていたはずのコンクリート柱は一本も立っているものがない。坂元駅のホームに行った。跨線橋の階段だけが残っていた。ホームの海岸側のレールはめ

くれるように持ち上げられている。ホームの南北両端でレールが折り曲がり、引きちぎられていた。

Sさん宅であったI先生は北大山岳部の出身である。東北大の神経病理担任教授を退官して、国立宮城病院長を務め、いまは定年退職して、悠々自適の暮らしを送るはずだった。大津波警報に自宅を出るべきか、とどまるべきか、一瞬のとまどいが身を守ることになったという。二階にいて、そのときを見ていた。津波が自宅を襲って夫人とふたり、窓枠によじ登ってカーテンレールにしがみついて、一階のガレージにとめてあった車が流されるのをみていると、ドンと家が持ち上げられたという。なすすべもなくそのまま流されるにまかせたという。ガン、ガリガリと家が傾いて停まった。暗くて寒い、長い夜を過ごさねばならなかった。翌朝ようやく夜があけて、常磐線の架線に屋根が引っかかっていることが分かったという。家財道具を持ち出すこともできぬまま、家は瓦礫として取り壊されてしまったという。

津波に流された家々、車、漁船、防潮林の木々、ありとあらゆる機材が瓦礫と化して上流の田圃におしよせた。自衛隊が捜索にあたり、捜索済みのところに瓦礫取り片付けの重機が入っていた。荒漠とした瓦礫の原に人影はなく、泥と油と海水を被った田圃は悲鳴を上げていた。津波の高さは一〇メートルあまり。津波は凄惨な光景をつくりだしていた。

山元町は福島県境の町である。Sさんは福島第一の事故による放射能被害を本気で心配している。

今回の地震に遭うまで、わたしは心情的な非原発派（反原発ではない）ともでもいうべきところにいると思っていた。福島第一事故について知りたいと思い、政府機関や東電等の発表は注意深く追ってきたつもりである。が、発表を聞くたびにいぶかしい思いを募らせていた。常に隔靴掻痒の思いを禁じえなかった。政府や東電は何かを隠している、と感じていた。

まだ付け刃のwikipedia学派の域を出ないけれど、世の中には強力な原発推進者に対して、根強い反対論者、いわゆるアクティビストがいることを知った。日本だけでなく世界中にFukushima daiichiを注意深く見ている技術者がいることも知った。かなり早い時期にUCSBやMITで大学が公開講義でFukushima daiichiをとりあげていた。このふたつの講義のことを教えてくれたのは杉山茂さんである。UCSBの講義は後述の松浦祥次郎さんが自分とほぼ同じ見解に立つものであると評価していた。わたし自身は講義の内容に必ずしも満足したわけではないが、Fukushima daiichiの問題点がはるかによく理解できた。日本政府や東電よりはるかに率直である。多くのデータを持っている。自分たちの知っていることをすべて話している。混乱するから情報を公表しないように、などという世間を馬鹿にした態度ではない。

幸いAACKには松浦祥次郎さんという優れた原子力工学の研究者、技術者がいる。かれが笹ヶ峰会のメーリングリストに早くから適切な解説をしてくれたおかげで、われわれは的確に事態を把握することができたといえる。この間、松浦さんは率直さ、真剣さをずっと貫いてきた。真摯で誠実なかれの態度はその解説が十分信頼するに足るものであると感じさせた。政府、東電の関係者がこういう姿勢で問題に取り組んでいてくれたら、事態はもっと違ったものになったのではないかとすら思っている。

福島第一の事故は簡単には蓋ができないもののはずだった。当初、福島第一はすぐにもなんとかなりそうに思わせていた。しかしだんだんTMIのあとを追っているという解説が流されるようになった。しかしそれは嘘であることはすぐにばれてしまった。TMIは施設の一部に不具合はあったものの、福島第一のように冷却系のすべてが破壊されたものとはまったく違っていた。Chernobylを嘲笑した日本の原子力技術者たちはたくさんいたらしいが、福島第一はかれらが経験したこともない事態だったらしい。知らなかったのだから、隠しようもないといえばそれまでのことだけれど、すこしお粗末に過ぎるのではないか。

原子炉は停まったから大丈夫、気になるのは使用済み燃料プールだといってみたり、注水するのは原子炉容器の中なのか、格納容器のことなのか、外から放水すれば水が入るのか、冷却水を循環する必要があるのか、汚染水を垂れ流しにしてでも冷却しなければならないのか。

報道陣や行政の事務担当者が知らないのは

責められないけれど、専門家（某教授）が施設さえちゃんとしていれば、一、二日で冷却できるといっているという新聞記事など読者をバカにするなと言いたくなる。こういうのを真の意味での専門バカという。

あまりにもひどいことが続きすぎる。福島第一の現状は極めて難しい状況にあることは素人目にも明らかだ。専門家でないから傍観するしかないという言いかたもしばしば聞かれる。が、原子炉を擁した文明社会は原子力工学者だけがつくっている訳ではない。原子炉・文明社会という複雑、巨大システムが揺らいでいるのだから、研究者、技術者だけでなく、普通に生活するひとが発言すべきであると強く感じる。

梅棹さんの作文指南
～『ガネッシュの蒼い氷』誕生まで

上田　豊

一九六四～六六年

一九六四年一〇月、京都大学山岳部隊はアンナプルナ南峰（別名ガネッシュ）の初登頂に成功した。登山のあと現役部員四人は、二手に分かれて二カ月近くネパール・ヒマラヤをワンダリングし、翌年二月に帰国した。そして一九六六年九月、吉野熙道・上田豊・木村雅昭・島田喜代男の共著『ガネッシュの蒼い氷』が「アサヒ・アドベンチュア・シリーズ」（泉靖一・梅棹忠夫監修、朝日新聞社）で刊行された。

帰国から刊行までの一年半の間について、わたしの手元には何の記録も残っていない。だが、わたしの記憶には、本一冊の誕生を越えるものが残されている。全体の記憶はおぼろげなのだが、梅棹さんが授けてくれたことは、ずっと大切にしてきた。半世紀ちかくの風化を経た頼りない記憶から、共著三人の記憶にも助けてもらって、当時のことを掘り起こしてみたい。梅棹さん四五才、わたしたち四人は二〇台前半の頃のことだ。

自分の思いを書け！

京都大学学士山岳会（ＡＡＣＫ）は、海外登山隊の初登頂成功の記録を、いずれも山岳会編著の公式報告書として大判の単行本で出版してきていた。京大山岳部隊としては初のヒマラヤ登山であったインドラサン初登頂の記録は、著者・京都大学山岳部として河出ペーパーバックスで刊行された。ガネッシュ隊の出版が梅棹さんのお世話になることとなったのは、インドラサン隊の出版を世話された桑原武夫先生の口利きだったようである。

本は、四人の現役部員が原稿を分担する四部構成とした。まず、京大山岳部に入部した新人がヒマラヤ初登頂を企てて出発に至るまでを、隊の中心にあった年長の吉野が、登頂記は年少のわたしに花をもたせ？二パーティだったワンダリングをそれぞれ木村と島田が書くことになった。

原稿を書き始めた頃だったか、一通り書いて目を通してもらった時だったか、梅棹さんは、おだやかな京都弁に熱をこめて言った。「これではあかん。自分の事を書け。個人の思いを伝えよ。遠慮はいらん。主観的に書け」

それでいいのかなとわたしは思いながら、隊としての立場からくる肩の荷が軽減され、開放感をおぼえた。反面、おのれが問われているというプレッシャーを感じた。気持を込めて書かねばならなかった。こうして後日、刷り上った本には四人の個人名がならび、共著書として刊行された。

梅棹流の伝授

原稿を書くにあたって、まず、二百字詰の原稿用紙を指定された。原稿用紙といえば四百字詰しか知らなかったが、文章の修正にあたって、小回りがきく使い勝手を知ることになる。

鉛筆・消しゴムで修正しながら書くのはアホや（このとおり言ったかどうか）とも。梅棹さんは、書きやすそうな高級万年筆を使っていた。原稿の清書は不要で、印刷所に出す原稿は、汚いほどベテランの職人が活字を組んでくれ、間違いが少ないという。

漢字はできるだけ少なく、頻出する僕・私（達）などは平がなで。一文は短く、段落ごとの区切りも長すぎないように。ストーリーは、順よく小見出しを付けながらまとめていき、その区切りは一定の短かさを保って冗長にならないように。などなど、指南は初歩の

手ほどきから始まった。

わたしたちは、原稿を書きなおしながら、北白川にあった梅棹さんのお宅に通った。当時は大阪市立大学の助教授で多忙だったので、アポイントは取っていたと思うが、帰宅は夜遅くなるのが常だった。奥様が出してくださったビールを飲みながら、四人は待った。梅棹家のビールは宝酒造のタカラビールで、コクのあるいい味がした。

やっと梅棹さんが帰宅しても、疲れきっていたり、酔っていたりで、そのままバタンと寝てしまうこともよくあった。それを、奥様が力ずくで起こしてきてくださった。こうして、徹夜でつきあってくれたこともあったし、原稿を見てもらえないまま帰ったこともあったように思う。

梅棹さんが原稿を見るときは、切れ味のよいハサミと糊を側に置いていた。原稿に書き込むだけの添削を越え、ハサミと糊で切ったり貼ったりの手作業になった。今では、ワープロのマウスを使った切り貼り操作にあたる。

ハサミで分断されて短冊状になった原稿は、順番が大きく入れ替えられた。要所・要所で短冊と短冊の間にスペースをとり、読者にとって抜けている情報や著者が伝えておくべき事柄を、わたしたちから聞き取りながら、万年筆を走らせ埋めていった。

こんなわけで、原稿の初めの方は、梅棹さんによる代筆に近かった。わたしの担当部分では、日本出国から初めてヒマラヤを望見するまでの七、八頁は、梅棹さんが書いたようなものだ。

梅棹さんは、原稿を預かって添削したのちに返す、ということはしなかった。いつも著者たちの面前で、手を入れていった。

わたしたちに要領がつかめてくると、のちの原稿に梅棹さんの手が入る事は、急速に減っていった。著者の気分が乗って書いているあたりは、四人がジーッと見守るなか、梅棹さんは静かに読み進んでいった。自分たちの感動をしるした個所には、ペンをはさむことは無くなっていった。

北白川のお宅では、原稿の事と離れて、梅棹さんを身近に知ることができる楽しさも大きかった。吉野はある日のことを思い出す。梅棹さんは奥の部屋から、アマニ油をよく塗りこんだピッケルを、いかにもいとおしそうに持ってきた。「もう使うこともないのやが、こないに大事には、してるのや」となでていた。

文章表現の極意

原稿校閲の初期の頃、わたしの原稿に目を通していた梅棹さんは、「ケラ、ケラ、ケラ」と声をたてて笑った。そこは、気張って美文調に書いた部分だった。情景の描写だったろうか。そこで言われたことは、こんな意味だったと解釈している。力まず自然体で、やさしい言葉を分りやすく配していけば、書き手の感動は、すなおに伝わる。

また、映画のコマが流れていくように、臨場感のあるカットを描写していくように、というふうに言われたことも憶えている。一〇年後にわたしは、登頂記『残照のヤルン・カン』を書きはじめた。その冒頭部、下宿していた名古屋からＡＡＣＫルームでの最初の会合に出席するところで、荒神橋からルームの中に至るまでの記述に半頁分ほどさいた。一行でも済むことだったが、梅棹さんの言葉をずっと意識していた一例だ。

「梅棹忠夫著作集」の『山と旅』の巻に付いた月報で、木村は「文章とはこのように書くのかと、眼からウロコが落ちた感じだった」と記している。まさに四人の学生の目から、ハラハラとウロコが落ちていった気がする。

原稿校閲も終盤となり、最後の第４部になると、著者の島田ひとりで梅棹さんを待つことも多くなった。帰宅が遅くなり、ちょっと休ませてくれと言ったきり、起きてこない事が増えた。それでも辛抱強く待つ島田に、奥様は話し相手になり、最後の方は台所や冷蔵庫のどこに何があるかを教えてくれ、どれでも食べてと言ってくださったそうだ。

こうして、わたしたちは原稿を書き上げた。梅棹さんは「まえがき」に、こう書いた。「アドベンチュアにも、正統と異端があるのである。……そのエリート性に、共感する人も反発する人もあろうかとは思うが、いずれにせよ、かれらは、エリートとして、恥ずかしくないだけのことをちゃんとやったということはできる」

『ガネッシュの蒼い氷』というタイトルは、年配の編集者の前で、四人で話しながら決めたと思う。氷の色は青でなく、スンナリと蒼を選んだ。出発までを書いた吉野の章には、

掲載する写真がなかった。出発準備をしている（ような）写真を急きょ撮るという裏ワザも使い、四人にとって人生最初の著書が誕生した。

書評集のことなど

梅棹さんが京大・人文科学研究所に移られたのは、一九六五年八月一日である（梅棹忠夫氏略年譜、栗田靖之編、ＡＡＣＫニュースレター五六号別冊、二〇一一）。それが、わたしたちの原稿書きのどの段階だったのか、記憶はない。よくお宅に通っていた頃は、大阪からの帰宅を待っていたという印象がある。

ただ、人文研の梅棹研究室で若い女性秘書の方が、わたしたちに瑞々しい桃をむいてくれたことを、まさにその桃のようなその場の雰囲気とともに憶えている。それは、刊行後に書評集を作る頃のことだったろうか。

梅棹さんが書評集の冊子を刷って配ろうと言ったとき、わたしたちは陰で、何でそこまで、とぼやいていた。これは『文明の生態史観』刊行（一九六七年一月）のころと重なっているかもしれない。

梅棹さんが秘書の助けを得て新聞・雑誌などから集めた書評は、一五篇あった。本の正誤表も付け、表紙とカットは島田が作り、小冊子は一九六八年一月に発行された。この書評集には、四人にとって面はゆいような、うれしい評価がならんでいた。後になって思うに、書評集は皆に自信を与えてくれ、いい記念にもなった。

お世話になった梅棹さんには、樋口明生隊長の発案で、貴船の料亭で一席もうけた。上尾庄一郎副隊長は北米留学中だった。清流に張り出した桟敷席で、わたしたちは感謝と打ち上げの杯を重ねた。出版の印税は、これでほとんど飛んでしまった。

それから四〇年を越えて

以上のようなことがあって間もなく、『知的生産の技術』が一九六九年七月、世に出た。わたしたちに言われたことの一部も活字になっていたが、直伝を受けられた事は、何よりも得がたかった。

二〇〇七年春、わたしは名古屋大学を定年退職した。それを機に、二〇年以上前の南極内陸での越冬・探査旅行記を書いた。ある編集者はその文章について、原稿を仲介したわたしの友人に、こんなコメントをくれていた……ドキュメンタリー映画のカメラを自分が手にしているかのように、よく見渡せます。これはまさに、梅棹さんに出会って以来ずっと、わたしがめざしていたものだった。出版は断わられたが、うれしかった。

退職記念のパーティでわたしは、海外での行動をスライドで紹介していった。その冒頭はガネッシュ登山であった。そこで帰国後の梅棹さんの指南にもふれ、大学生時代に受けた一番大切な教育だったと述べた。

出席していたＡＡＣＫの斎藤清明さんが、ちょうどこれから梅棹さんに会うから、このことを伝えておくと言ってくれた。ずっとお伝えしたかったことなので、ありがたかった。

いまだ心に残っていることがある。奥様には、北白川のお宅で四人の学生をあたたかく迎えていただき、疲れきって帰宅した梅棹さんを何度もわたしたちの前に座らせてくださった。その頃のことを、今でもわたしたちは深く感謝していることをお伝えしたい。

西堀榮三郎邸の公開と南極探検特別企画展の開催

栗本俊和

一月二八日から第一次南極越冬隊長を務めた西堀榮三郎先生の自宅が一般公開され、同時に「特別企画展　白瀬矗中尉と西堀榮三郎の南極探検」が三月二七日まで開催された。

一月二八日は西堀榮三郎隊長の誕生日であり、また白瀬中尉が南極・大和雪原に到着してちょうど九九年目の日でもある。そのため、この日が選ばれた。企画したのは、西堀さんの三男の峯夫さんが代表理事を務める「第一次南極越冬隊長　西堀榮三郎邸《人生にロマンを求める会》」である。自宅（東京都大田区鵜の木1-20-1）は一九三七年に建てられ、木造二階建ての約二〇〇㎡。自ら設計したという山小屋風の建物で玄関脇に樹齢約八〇年のヒマラヤ杉がそびえ、室内には手作りの暖炉、屋根裏部屋がある。今西錦司先生の著書や愛用した竹製のスキー用ストックも残され

西堀榮三郎邸 で 人生を語り 夢を語り 大いに楽しみませんか・・・

家の東側も木々に
囲まれています

榮三郎拘りの
台所 と 食堂の
間の ハッチ で
昭和初期には
珍しくモダンです

榮三郎手作りの 暖炉 です

チョロチョロ と赤く
優しく燃える 炎 に
ロマンを感じて
グラス を手に
夢 を語り合えます

素敵ですよ

暖炉のある広い居間と食堂で
パーティー は如何ですか !?

夏でも
クーラー要らず
の涼しい家で
蝉しぐれ と
小鳥の囀り と

秋には 虫の音
が 楽しめます

又 庭に出て
バーベキュー
を楽しみましょう

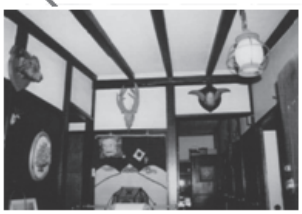
日本間 と 洋間 続きです

イベント や セミナー や お稽古など
何にでも 別々でも 自由に ご利用下さい

切り通しから もう
山登り気分満喫です
涼しい木陰をゆっくり
登りましょう

玄関に着きました
ヒマラヤ杉がお出迎え

紐を引くと
カウベル が・・・

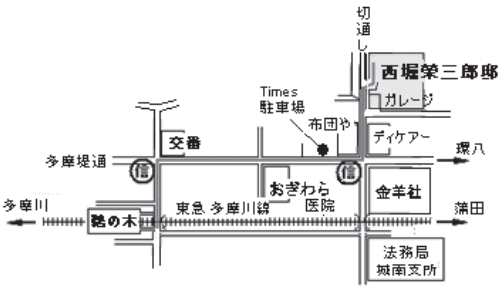


玄関に入ると ペンギンや
日本カモシカ が出迎えてくれます

庭の下には
防空壕があり
戦時中ご近所
の多くの方々
が 待避されま
した

一般社団法人
第一次南極越冬隊長 **西堀榮三郎邸**
人生にロマンを求める会

〒146-0091 東京都 大田区 鵜の木 1丁目 20-1
Tel & Fax： 03-3750-3917
携帯 ： 090-6318-7414
e-mail： eurovactech@aol.com



電車の場合
東急多摩川線 鵜の木駅下車 徒歩 3分

お車の場合
環八「区民プラザ入口」信号より多摩堤通下丸子方向
3 分に 「法務局出張所入口」信号を過ぎ 右手 に
Times 駐車場あり そこから徒歩 1 分

ている。

オープニング記念パーティでは、応接間で白瀬中尉の記録映画が上映され当時の厳しい探検の様子が偲ばれ、居間ではお酒と料理を友に大勢の関係者との間で名刺交換などあり、いろいろな人との知遇が得られた。

今年一二月はアムンゼンの南極点到達から一〇〇年、そして来年一月は白瀬中尉の大和雪原到達から一〇〇年目を迎える。峯夫さんは「筋目の年に、この自宅を公開することにより、探究心が育まれた雰囲気を感じていただき、分野を超えた人々の集いの場にしたい」と話す。自宅はセミナー会場や宿泊施設としての利用も可能という。

会の案内パンフには「西堀榮三郎邸で人生を語り、夢を語り、大いに楽しみませんか……」と書かれていて、皆さんの来訪を心からお待ちしておりますとのことです。

西堀榮三郎邸《人生にロマンを求める会》

開邸時間　通常一〇：〇〇～一七：〇〇（入邸は一六：三〇迄）
催事　事情により変更あり（応談可）

閉邸日　月曜日・火曜日　祭日は開邸（翌日閉邸）
年末・年始（一二月二六日～一月六日迄）

入邸料　大人：五〇〇円
小・中学生：二五〇円
特別会員：無料　賛助会員：半額

催事　イベント・セミナー・パーティなどの開催日　催事参加費：別途設定
催事に部屋を利用される場合＆宿泊費：別途に定める

会員動向

《編集部より》お亡くなりになった会員の追悼のことばは、来年三月発行の本誌六〇号に掲載予定です。故人に送る会員の皆様のおことばをお待ちしております。

山口・廣瀬追悼歌集のDVD

岩坪五郎氏の発案・企画、寺本巌氏の選曲・編集と技術で、山口克、廣瀬幸治氏を偲んだ歌集のDVDが製作された。きっかけは岩坪氏が当誌に廣瀬氏の追悼文を書くべく、インターネットでドイツ語の歌を検索されたところ、You Tubeで動画とともに歌曲がたくさんあらわれたことから、追悼歌集の製作を思いつかれたという。しかし言うはやさしいが、まず選曲をして、歌曲と動画をパソコンに取り込み、それを編集してDVDのビデオに仕上げるのには相当の技術が必要。これを寺本氏が実現された。そのうえに原語の歌詞が別冊に付く。収録されている曲は次頁の一九曲。

もっとも圧巻なのはIch hatt' einen Kameradenの曲をバックに一九五二年の知床遠征の写真がスライドショウであらわれる第一章。この写真は寺本氏の秘蔵のもの。当時この隊でカメラを持参したのは隊員では中島氏と寺本氏のみ。しかし中島氏のものは現地で凍ってしまい使えなかったが、寺本氏は事前にカメラのグリースを極寒用のものに取り換えておられたので撮影ができたとのこと。

このDVDのすばらしさは、岩坪、寺本両氏に送られた数々のお礼状に添えられたコメントからおわかりいただける。そのいくつかから抜き出してみよう。

『五二年厳冬期の知床遠征を身近に思える人は今や少なくなったでしょうが、本歌集にある映像はさすが一級品です。最初の沸きあがるバブルの向こうに雪まみれの二人の山男が出現するところとその時の荘重で厳粛なIch hatt' einen Kameradenの調べが私にはもっともアッピールしました』。『冒頭の知床のフィルムは圧巻です。これだけでも充分なのに各歌ごとにそれにふさわしいシーンが現れムードを盛り上げてくれます。全体のトーンが統一されていないところにかえって味があります』。『なんとも憎い選曲と配置に頭がさがりました』。『すべて凝った仕上げはさすが高貴さを感じました』。『昔のあの装備でよく行ったものだと改めて感服しました』。『シャボン玉が流れ、消えてゆくのが、お二人の人生を象徴しているようで、悲しく、印象的でした』。『カバーの写真が絶好』。

Ich hatt' einen Kameraden
Das gibt's nur einmal
O Tannenbaum
Muss i denn
Des Försters Töchterlein
Lustig ist das Zigeunerleben
Am Brunnen vor dem Tore
My Darling Clementine
Il testamento del capitano
She Wore a Yellow Ribbon
The Call of the Faraway Hills
Do not forsake me, My Darling
Avanti Popolo
It's a Long Way to Tipperary
Die Liebe Der Matrosen
Das Englandlied
Lili Marleen
Blowing in the Wind
The Green Green Grass Of Home

また収録された曲のどれもが聞く人の若かりし山岳部の活動と重なり感動を覚えられ感激で涙した方も多かったようである。コメントの多くがそのことにふれておられる。『懐かしい数々の曲に青春の日を思い出し、一緒に唱和しました』。『歌ごとに仲間たちの顔が、山行が瞼に浮かんできます』。『It's A Long Way To Tipperaryはコンパで皆で肩を組んで足をあげてラインダンスよろしく歌ったのが懐かしいです』。『これらの歌でも我々は繋がっているのだなと思いました』。『山口・広瀬両先輩だけでなく、これまでに亡くなった私と同年配の京大山岳部の仲間、加納セイハク、杉野シメチョー、宮木トク、富田さん、松田ランプ、虎見バーテン、池野ゲボ、浅野パンネ、井上ジロー等を思い出しました。唄を聴きながら、この唄は彼が好きだった、あの唄はあいつがよく唱っていたと思いだし、涙がポロポロとこぼれてきました』。ただ歌い継がれている歌も世代の移りによってでだんだん忘れ去られたり、変調になったりしていることをコメントされた方も多い。『先輩たちの世代にはこうしてすべてを原語でうたっておられたことに敬意を表します』。『これが正調なのかとの感強く、山岳部の先輩にお会いした様な不思議な気分を味わいました』。『我々の発音が如何にでたらめであったかが良くわかりました』。『なかには、ちゃんと教わっておらず、口まね程度しかできない歌もかなりあり、あらためて年代、時代の違いを感じました』

そして最後には『追悼集もいいけれど、こういう形での追悼歌曲も胸を打ち、故人を偲ぶのにすばらしいものであるということを実感しました』。『山口・広瀬先輩だけでなく多くの京大山岳部仲間の追悼歌集として、大切に保管させて戴きます』。『この夏にでもヒュッテで歌唱大会をやりましょう』。という提案や『私の宝物が増えました』。『いずれ来るべき私の葬儀にはBGMとして使用させていただくつもりです』。とのコメントも寄せられている。

まだこのDVDをお持ちでない方は岩坪五郎氏にお申しください。送料も含めて無料でお頒けいただけるが、残部僅少とのことです。

（前田　司記）

事務局報告

【理事会決議録】

日時　平成二三年五月一五日（日）
午後一時から午後二時五〇分

場所　京都市上京区烏丸通上長者町上ル
京都平安ホテル

出席理事　上田豊、山岸久雄、松林公蔵、前田司、横山宏太郎、幸島司郎、永田龍、吹田啓一郎、竹田晋也　以上九名

委任状によるもの　前田栄三、松沢哲郎、牛田一成、中川潔、人見五郎、高尾文雄、小林尚礼　以上七名

出席監事　福嶌義宏、伊藤宏範　以上二名

議事の経過および結果

会長上田豊が議長となり、議事に入った。

平成二二年年度事業報告、平成二二年年度収支決算は、逐次審議の結果、満場一致でこれを承認した。

任期満了に伴う本会役員の改選について、左記のように改選候補者案が提出され、審議の結果満場一致で承認した。

理事：松林公蔵（会長）、山岸久雄（副会長）、幸島司郎（副会長）、前田司、前田栄三、横山宏太郎、松沢哲郎、牛田一成、中川潔、永田龍、人見五郎、吹田啓一郎、高尾文雄、竹田晋也、小林尚礼、以上一五名。

監事：伊藤宏範、福森亮二、以上二名。

海外登山・探検助成審査委員を選任した。

審査委員長　横山宏太郎、審査委員　幸島司郎、山田和人、中山茂樹、小林尚礼

以上をもって議案すべての審議を終了したので議長は閉会を宣し解散した。上記の決議を明確にするため議長および議事録署名人が議事録末尾に署名押印する。

平成二三年五月一五日
社団法人　京都大学学士山岳会理事会

【総会決議録】

日時　平成二三年五月一五日（日）
午後三時から午後五時

場所　京都市上京区烏丸通上長者町上ル
京都平安ホテル

正会員の総数　二四六名

出席者数　一四七名（うち委任状出席一一四名）

議事の経過および結果

会長上田豊が議長となり、下記議案の審議に入った。

平成二二年年度事業報告および収支決算、平成二三年年度事業計画を議場に諮ったところ、満場一致で承認可決した。

任期満了に伴う本会役員の改選について、左記のように改選候補者案が提出され、審議の結果満場一致で承認可決した。

理事：松林公蔵（会長）、山岸久雄（副会長）、幸島司郎（副会長）、前田司、前田栄三、横山宏太郎、松沢哲郎、牛田一成、中川潔、永田龍、人見五郎、吹田啓一郎、高尾文雄、竹田晋也、小林尚礼、以上一五名。

監事：伊藤宏範、福森亮二、以上二名。

諸般の事情により当法人が一般社団法人へ移行すること、またそのために定款の変更を要する件の承認を求めたところ、満場異議なく承認可決した。

以上をもって議案すべての審議を終了したので議長は閉会を宣し解散した。上記の決議を明確にするため議長および議事録署名人が議事録末尾に署名押印する。

平成二三年五月一五日
社団法人　京都大学学士山岳会総会

報告事項

一　新入会員について

本年度については、現時点では新入会員がない旨が報告された。

二　梅里雪山峰登山隊の捜索について

小林尚礼理事の現地訪問概要が報告された。平成二三年度も現地捜索を継続することが確認された。

以上

【事務局からのお知らせ】

一般社団法人への移行

内閣府への手続きを進めていました「一般社団法人」への移行申請は、六月中に認可される予定です。

発行日　二〇一一年六月末日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　上田　豊
発行所　〒六〇六―八五〇一
京都市左京区吉田本町（総合研究二号館四階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
竹田晋也　気付
編集人　前田　司
製　作　京都市北区小山西花池町一―八
㈱土倉事務所